

大学リメディアル教育に関する一考察

— 東北芸術工科大学における学習者意識調査をもとに —

A Study of Remedial Education at Universities

— Based Upon the Attitude Survey of Learners at Tohoku University of Art and Design —

亀山 博之 | Hiroyuki KAMEYAMA

With the growing diversification of university entrance examinations due to the decreasing birth rate in Japan, the decline in the academic ability of university students overall has been a troubling problem. This is why many universities have been compelled to set up remedial education courses. However, the content being taught is not university level. The Ministry of Education even gave a candid opinion that universities should at least avoid teaching junior high school-level classes.

To be sure, remedial education as a countermeasure has been considered essential for this particular condition. But, is the academic ability level of university education specified? Moreover, is there any guideline for properly conducting remedial education at universities? By analyzing the results of an attitude survey targeting students at Tohoku University of Art and Design who were placed in a remedial English course, we come to realize that remedial education must include the aim and methodology to nurture autonomous learners. Conversely, as long as remedial education at universities is capable of cultivating a learner with a self-reliant mind, it is still worthwhile, notwithstanding its junior high school-level learning contents. There is a great possibility for remedial education to enable students to eventually achieve university readiness.

Keywords:

リメディアル教育、学力水準、自律的学習者

Remedial Education, Academic Ability Level, Autonomous Learner

1. 大学における英語教育の現状

2013年2月、文部科学省は新設の大学や学部の運営状況の調査結果および改善要求の内容を発表したが、そのことが教育現場のみならず一般の新聞の紙面を賑わせたことは記憶に新しい¹⁾。というのも、その改善要求の内容が多くの人々にとって少なからず衝撃的な響きを持っていたからである。ひとつには、大学設置基準を満たしていない教員数の改善が求められていた。そしてもうひとつは、大学の授業にもかかわらず、中学校レベルの英語の授業に対して単位認定がなされているという状況についての改善要求であった。大学でbe動詞の用法についての授業が行われているという見出しをもって、新聞をはじめとするメディアがこぞって煽り立てたのである。

大学における英語教育についての文部科学省からのこうした改善要求について—特に授業のレベルの問題—考えなければならないことは、少なくとも二点挙げられる。第一に、この要求は新設の大学および学部に向けられたものではあるが、実際には、これら以外の多くの大学の英語教育の現場でも以前から問題になっていたことであるという点だ。この点についてはまず、このような状況を生み出した社会的背景を見なければならない。一般的には、学生はみな大学に入学する前まで中学校入学から高校卒業までの6年間、英語教育を受けてきたという背景を持つ。その継続としての発展的な授業が大学の英語教育に期待されていることは自明の理であるが、にもかかわらず、それができない状況は大学だけの問題ではなく、中学、高校までの英語教育に対する改善の必要性も暗に示されている。このことは、18歳人口の減少にともない、各大学が入学者確保の策と

して講じた様々な種類のAO入試の導入などによる入学者選抜の緩和が招いた大学生の全体的な学力低下ということとも関連しているだろう。また、大学の英語教育の実際の現場において優秀な学生の減少という問題よりも深刻なのは、同じ大学、学部の中でありながらも新入学生の基礎学力の幅が増大していることであるという指摘もある。小野博によれば、これがいわゆる大学「水準」の授業の成立を一層困難にしているという。これに対しては、学生一人一人のレベルにそれぞれ対応するe-learningの効果的な利用法という対策が考えられたりもしている。しかし、e-learningは基本的に学生の自習を前提としているものであるから、これは大学における授業の実践についての抜本的な改善策だとは言えない。ほかの対策として、たとえば本学では、全新入学生を対象とした入学時英語プレースメント・テスト（TOEIC BRIDGEを利用）による学力別クラス分けによりクラス内の学生の学力レベルの均一化を図っている。しかし、これは学生の学力レベルの幅を狭め、効率的な授業の成立に貢献するものの、be動詞の用法の解説を行う授業で単位を認定するという状況の改善にはつながらないのである。このように、大学における英語の授業のレベルの改善という問題一つを見るだけでも、いかにその背後に潜む問題が多く、また、それに対する教員側の試行錯誤の末の対策案も多岐にわたるということが見て取れる。そしてあらためて、この問題は、文部科学省が要求を出した新設の大学、学部だけの問題ではない、全国的な問題であるということを考えなければならない。

第二に、be動詞を教えるという中学レベルを脱した授業を大学で行うべきであるという文部科学省からの要求を考えると、大学における英語教育の一般的な水準とはいったいかなる方法で定義され、何らかの形でもし定義されたとして、それを日本のすべての大学でいかにして保持していけばよいのだろうかという問題も生じてくる。当然のことながら、たとえば文学や英語教育を専攻する学生と芸術を専攻する学生との間には、英語に対する意識や学力レベルの差が生じる。また、先に述べたように、同じ学部内の学生間の増大するレベルの差も考慮しなければならない。そこで注目されるのがリメディアル教育の必要性和その個別性である。つまり、中学レベルの英語の学力のまま入学する学生がいるという事実がある限りは、大学における英語の授業の想定される「一定水準」に近づくための努力のなかで行われるリメディアル的な性質の強い授業は欠かすこと

はできない。そして、大学、学部という枠で見た場合、文学部には文学部の、芸術学部には芸術学部の特徴や傾向というものがあるはずであるから、普遍的、絶対的な教育実践というよりも、一人の教員が受け持つクラスだけに通じる個性の強い授業展開が求められるのである。

次に、そもそも本来の授業に対しての「リメディアル」教育のあり方とはどのようなものなのかという問題を念頭に置きながら、リメディアル教育そのものについて、そして、先の文部科学省からの要求に応えることのできる、あるべきリメディアル教育の効果的実践について考えてみたい。

2. リメディアル教育の再定義への試み

いわゆる中学レベルの授業内容—be動詞の解説など—に終始してしまうようなことのない大学の授業を行うようにせよという文部科学省からの要求は、中学英語の授業の改善要求でもあること、そして、少子化にともなう学生数確保に苦勞する大学側の策としてのさまざまな形態の入学試験を行うに至った結果、実際に多くの大学において、その大学の求める学力水準に達していない学生を抱えるという事態を招いているということの2点を指摘するものであったことを確認した。そしてこれは、大学におけるリメディアル教育を行うことについての賛否はさておいて、それが不可欠な状況であるということを再確認させるものでもある。

それではまず、リメディアル教育とはそもそも何を指すものであろうか。山岡華菜子はこれを「入学者の学力低下に伴い専門教育の推進が困難である現状において、高校卒業までに習得すべき学習内容の補修の授業」と定義している。それぞれの大学によって求められる学力レベルは異なる。またここでは、高校卒業時に身につけておくべき英語の学力を客観的に示していないし、また、事実それを示すことも難しいことから、大学における英語のリメディアル教育はどの水準まで学生を引き上げるべきかということが明確化されていないことに気がつく。合田美子が「基礎的な学力、例えば中学英語の文法がどこまで身に付いているのか、いないとかいう学習内容に重点が置かれていることが多いようである」と大学における英語のリメディアル教育の傾向を指摘していることを例に挙げつつ、奥羽充規と福元広二は「そもそもそれだけの学力の学生が大学生になれて

しまうという憂慮すべき現実」を認めている。ここで確かなことは、「大学で中学英語?」と疑問を投げかけながら文部科学省の要求がセンセーショナルに大学教育の在り方について問題提起をしていたことは大げさなパフォーマンスだったのではなく、大学における英語のリメディアル教育は、中学英語のレベルまで引き下げて行わなければならないという状況を逆に明示したものであったということである。それぞれの大学の学力水準、そして学生一人一人の差の幅は一層増大していく傾向にあることも手伝って、大学入学時に学生に求められる学力のレベルは絶対的に提示できるものではますますなくなってきている。だからこそ山岡はあえて先のリメディアル教育についての定義のなかで、そこに望まれる一般的な水準というものを示していないとも考えられる。それは、大学ごとに、さらには学部ごと、クラスごと、理想的には学生個人の単位にまで個別化させて考えねばならないものであるということを暗に示している。ゆえに、リメディアル教育の今後の展開は、ますます個性を備えて発展していかなければならないように思われる。

この個性という観点からリメディアル教育を考えつつ、全国の大学生に一律に求められる英語の学力の水準の在り方を考える視点の一つに「絶対的リメディアル教育、相対的リメディアル教育」というものがあることに注目したい。これは奥羽および福元が、ある大学でのリメディアル教育の実践報告は他大学にとっては適応することが難しいという事実をあげて提言しているものであるが、これは大学間での学力レベルの差があること、そして、大学生に求められる学力レベルの基準が示されていないことによって生じる問題を回避するための分別方法である。つまり、ひとりの教員が担当するクラスを分析したうえでそのクラスだけのための方法論に基づいて実践されるリメディアル教育は、当然のことながら非常に個性が強いものになるが、それを相対的リメディアル教育と呼ぶことにして、全大学に共通する絶対的リメディアル教育とは区別しようというのである。そうすることによって可能となるのは、絶対的リメディアル教育が示す全国的に共通する大学生に望まれる学力の水準の設定であったり、学生に対する目標の正確な明示であったりするというのである。たとえば現在はTOEICテストが大学生の英語力を測る物差しとして広く活用されているが、TOEICテストが英語力のすべてを正しく測定するものではないことを考えれば、また、大学生に求められる英語の学力はTOEICテストの点数ではない別のものであるはずだとい

う考えに立ち返れば、絶対的リメディアル教育の成立は非常に多くの問題を抱えていることが一目瞭然である。たとえば、これからTOEICに代わる新たな物差しをつくり出そうとするとき、そもそも大学生に求められている英語力とはどのようなものであるべきかという議論からスタートしなければならない。事実、そのことでもう何十年も振り子のように方針はあちこちに揺らぎ、定まってはいないのである。よって絶対的リメディアル教育の追求は、相対的リメディアル教育における実践的方法論を支える英語教育の理念を常に確認させる指針として存在させるなかで行われるのが妥当ではないだろうか。また、綿密な分析や研究に基づいて行われる相対的リメディアル教育の中から絶対的リメディアル教育の方針が生み出されるという可能性もあるだろう。

個性性という点において、このように相対的リメディアル教育は教員の日常的な職務により密接にかかわるものであり、実際、全国の大学で実施されているリメディアル教育の展開や実践の手法は極めて個別的な形で多岐にわたっている。さてここでもう一度、大学の授業でbe動詞の解説をせざるを得ない状況について見直してみたい。リメディアル教育の必要性はもはや否定できないものである。そして、教育現場に実際に立つ教員にとっては、中学レベルの英語を大学で学ぶ状況へ導くこととなった社会的背景の問題よりも、学習者の心の問題に関心を払うことのほうが求められている。というのも、リメディアル教育が必要であると判定された彼らには、そこに至るまでにそれぞれ学習を困難と感じさせる悩みや心理的な様々な要因を抱えている。清田洋一によれば、英語が苦手であり、そのことでつらい思いをしてきたお大学に入ってからまで中学レベルのテキストを預けられる学生の心理は、決して無視することはできない問題なのである。たとえば、本学では英語は必須ではなく選択制の科目として位置付けられているが、英語がみな好きで受講しているかといえばそうではない。しかしながら、自主的に英語を学ぶことを選択してきたのだからという理由だけでリメディアル教育を押し付けることで彼らの自尊心を傷つけることも十分あり得るのである。

次に、本学におけるリメディアル対象クラスにあたる「基礎クラス」受講生を対象に行ったアンケートの集計より学生の心理的な背景を浮き彫りにしてみたい。繰り返すが、リメディアル教育の実践の際に見逃してならないのは、制度的な問題よりも学生の心理である。英語教育が取り扱うべきものは、英語という言語の知識や運用能力に加えて、自ら学

ぶ姿勢がなければならないことを忘れてはならない。与えられた課題をこなすという学習は、大学における学びの精神とは合致しないのである。これは塩澤正が同じく指摘するところのAutonomous Learner(自律した学習者)を目指す意識に共鳴するものである。

3. アンケート回答の分析にみる 学習者意識の特徴

東北芸術工科大学の英語のクラス展開は、基礎クラスから初級、中級、上級、発展クラスが設置され、レベルアップを図りながら継続して英語の学習を行うことができるようにデザインされている。また入学時のTOEIC BRIDGEテストを利用したプレースメントテストによって、学習をスタートするレベル判定が行われている。そして、学期末には基礎クラスの受講生はTOEIC BRIDGEテストの、初級以上のクラスの受講生はTOEICテストの受検が義務付けられている。

本学では、文法事項の定着の徹底を目指したテキストとTOEIC BRIDGEテストの実践練習を取り入れたテキストを併用して授業が行われている基礎クラスが英語リメディアル教育としての位置付けにある。2014年度前期にこの基礎クラスを履修した全学生に、学習についての意識調査に協力を依頼し、学期開始時と学期終了時のそれぞれにアンケート調査を行った。学期開始時の回答者は139名、終了時の回答者は114名である

質問の内容はそれぞれ10問、以下のとおりである。

—〈A〉学期開始時アンケートの質問内容—

- (1) 高校まで英語は好きな科目でしたか?
- (2) 高校までの英語の授業は楽しんで受けられましたか?
- (3) 高校までの英語の宿題はしっかりこなすことができましたか?
- (4) 宿題以外にも英語の学習にすすんで取り組んできましたか?
- (5) これまでの学校生活で英語はどれくらい勉強してきましたか?

- (6) これからの学生生活で、英語の学習はすすんでやりたいと思いますか?
- (7) 英語が得意になりたいですか?
- (8) これからの人生で英語にすすんで関わっていきたいと思いますか?
- (9) 海外に行って英語を使いながら芸術活動をしたいと思いますか?
- (10) 英語で何ができたらいいと思いますか? 自由に記入してください。

—〈B〉学期終了時アンケートの質問内容—

- (1) 英語への関心は高まりましたか?
- (2) 授業は楽しく受けることができましたか?
- (3) 課題はこなすことができましたか?
- (4) 課題以外にも英語の学習にすすんで取り組んできましたか?
- (5) 授業以外の1週間の英語の学習時間はどれくらいでしたか?
- (6) 英語の学習を継続したいと思いますか?
- (7) 英語の学習習慣がついたと思いますか?
- (8) 英語学習の具体的な目標が見えるようになりましたか?
- (9) これからの英語学習では主に何をしたいと思いますか?自由に記入してください。
- (10) 授業の中でもっとやりたかった活動などはありますか?自由に記入してください。

これらの質問に対し、自分の考えや気持ちに最も合うものを、そう思わない～とても思う、感じない～とても感じる、もしくは、当てはまる学習時間の中から五段階の選択肢のどれか一つに当てはまるものを選択してもらうことで被験者から回答を得た。また、学期開始時のアンケートの間(10)、および、学期終了時のアンケートの間(9)、間(10)は自由回答の形式をとった。それではまず、学期開始時のアンケートの集計結果を項目別に区切りながら報告する。以下、質問別に回答を集計したグラフである。

まず、問(1)から(5)[Fig.1-5]に関しては学習者の高校時までの英語学習に対する意欲や関心、これまでの取り組みの実態を探るための問いの集合群である。ここで明らかになるのは、全体的に英語を好んで取り組んできた学生

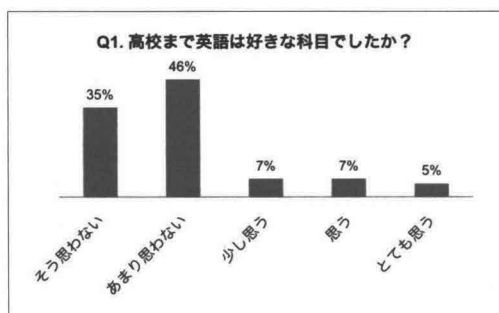


Fig.1

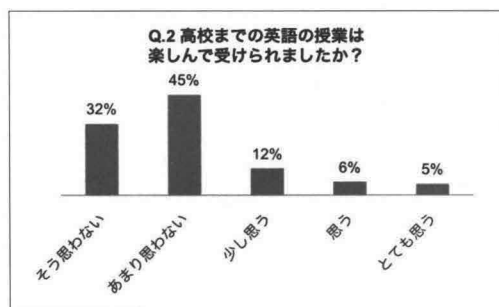


Fig.2

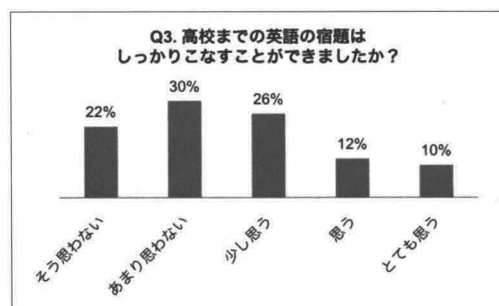


Fig.3

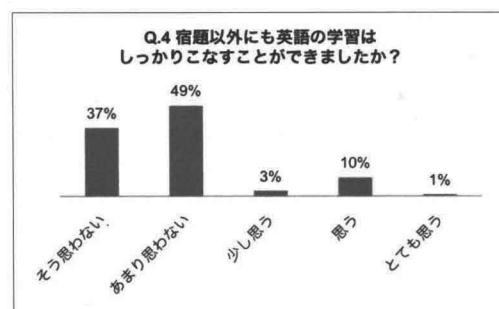


Fig.4

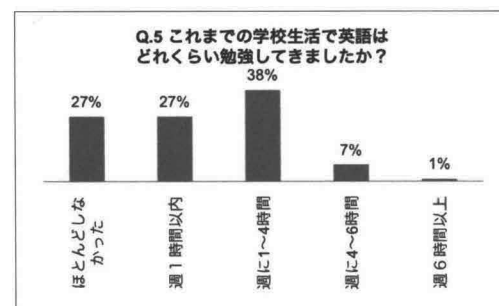


Fig.5

の圧倒的な少なさである。英語が少なからず好きな科目であったと回答した学生の割合はわずか19%である。また、自律学習、自学の時間についての質問への回答からは、自主的に学習してきたという意識のある学生は14%、対して、学習時間に関しては週に4時間以内にとどまっていた学生の割合は92%にもなる。語学の習得には継続的な学習が欠かすことができないということは自明の理である。よって、本学におけるリメディアル教育の課題のひとつは、自主的に毎日継続して学習する習慣を形成させるということが挙げられるのは確実である。

次に問(6)から(9) [Fig.6-9]への回答結果の集計に目を転じてみよう。

これらの問いは、学習者の過去の取り組みのあり方にかかわらず、このリメディアル・クラスを受講するにあたっての関心や意欲をみようとしたものである。英語の学習がこれまで好きでなかったという履歴がありながらも、英語を大学で取り組みたいと気持ちを新たにしている学生の多さは見逃せない。英語が得意になりたいと願う学生は92%、今後も英語にすすんで関わっていききたいと送りたいと考えている学生は半数以上いるのである。よって、自尊心を傷つけかねない教材や教育方法の選択を行わないための注意は十分に払われなければならない。先に述べたように、学習者の意欲をそいでしまうようなリメディアル教育実践に陥りやすいからである。また、本学は芸術系大学であることから、問(9)では海外での芸術活動への関心の有無を尋ねている。というのも、本学における英語教育の必要性といえはほぼ決まって、芸術で世界進出するには「英語くらい話せない」という台詞で語られることが多いからである。実際にこの「英語くらい話せない」といけないという意識は、芸術を志す学習者にとってどれほど共有されているのか。今回のアンケートの集計結果では、英語を活用して海外で芸術活動をしたと考えている学生は総数にして64%であった。海外進出のための技能として英語が必要不可欠という理由を挙げたところで、それが学習者の動機づけになるかどうかは判断し兼ねる結果である。少なくとも、芸術に関心がある学習者にとって刺激となるような教材を研究するなどの教員側の努力は欠かせないだろう。

学期開始時のアンケートの問(10)は先に送ることにして、次に学期終了時のアンケートの集計結果もまた同じ

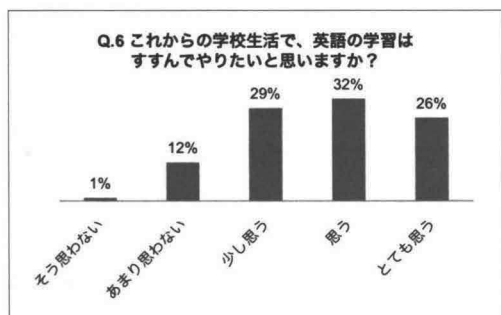


Fig.6

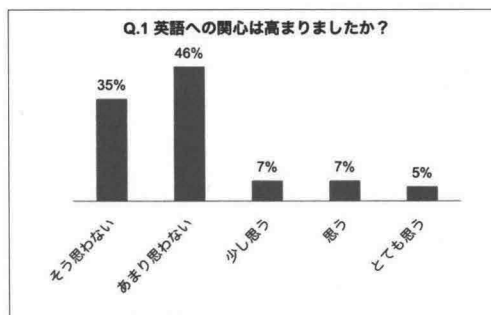


Fig.10

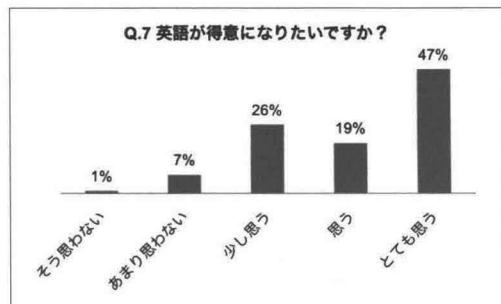


Fig.7

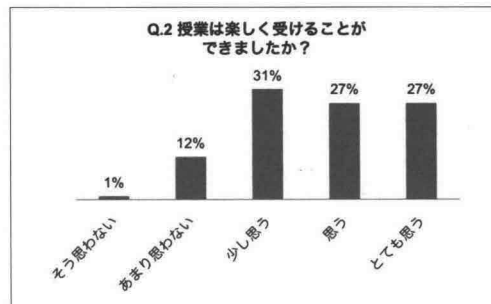


Fig.11

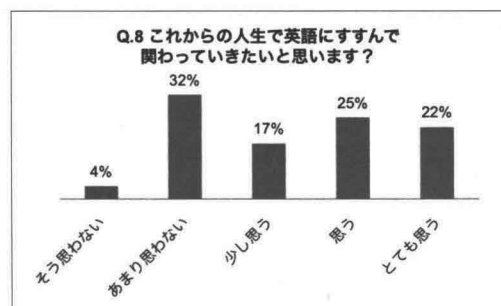


Fig.8

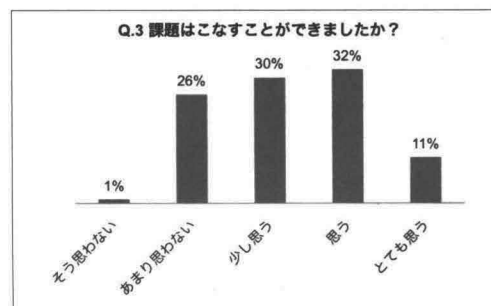


Fig.12

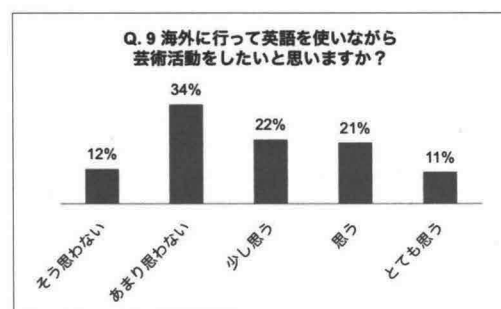


Fig.9

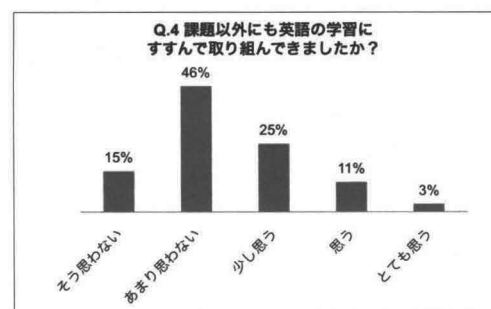


Fig.13

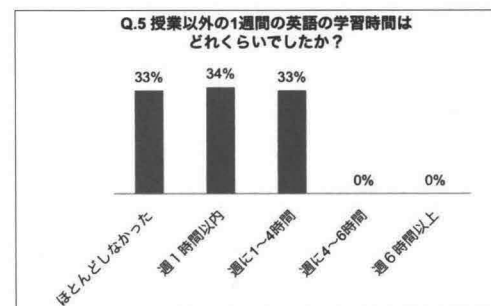


Fig.14

く項目別に区切りながら報告を行う。以下、問(1)から(5)
[Fig.10-14]までの集計結果をまとめたグラフである。

これらは、学期を通して学んだ後の英語への関心の変
化を見ようとした問いである。実質わずか4か月ほどの学習
でありながらも、確実に英語への関心の高まりが見える。高
校まで英語が好きでなかったと答えた学生の割合が81%

であったことを考慮すれば、大学のリメディアル教育を経て87%の学生が英語学習に関心を改めて示し出したという事実は、その限界が指摘されるリメディアル教育にもまだ発展していく可能性が十分に残されていることを示していると考えられよう。一方で、問(4)、(5)への回答への集計結果に明らかなように、学習者の自律性と学習の習慣化の形成を促す方法の模索が求められている。筆者の担当したクラスでは、毎時間の予習および復習のプリント(ポキャブラリー、文法小テスト)を学生に課していたが、ほとんどの学生はこれらをこなす以外の学習はしていなかったと推測される。また、学習者の課題に見られた特徴的な共通点として、指定された範囲外の学習内容への対応に困難を感じるという傾向があることが挙げられる。このことは、自律した学習者を育成するためのリメディアル教育の実践方法を考える際、いわゆる学習者のスキーマやレディネスを正しく見極め、

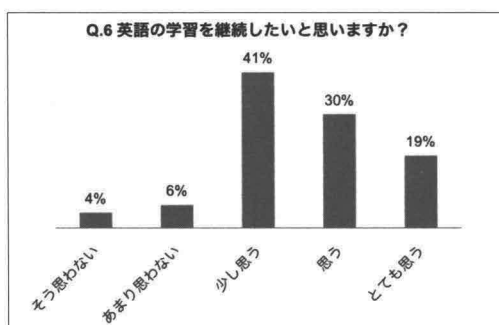


Fig.15

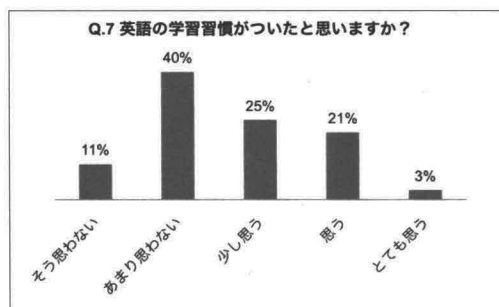


Fig.16

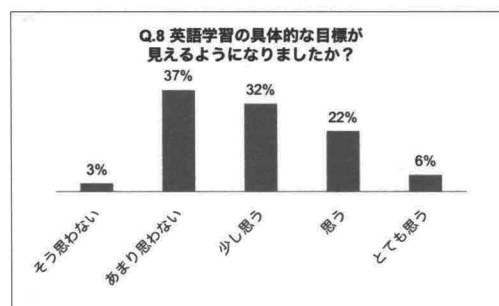


Fig.17

どのような教材を用いていくかを決定する際に欠かすことのできない判断材料となるものである。次に、半期の授業を終えた学習者が今後いかに英語に取り組んでいこうとしているかを分析するための問(6)から(8)[Fig.15-17]への回答の結果を見てみる。

継続して英語を学びたいと答えた学生は90%にものほっている。基礎クラスを終えたのちにも初級から発展クラスまで継続した学習の中でレベルアップを図っていく道を用意している本学の英語教育の体制はここでその価値を発揮するはずである。また、学習習慣がついたと考える学習者が半数を切る49%であったという結果は、先にみた学習時間についての回答結果と併せて、リメディアル教育の実践における一番の課題であると思われる。大学という教育機関は自律した学習を行うことができる学生が学ぶ場であるという大前提は、「大学の授業でbe動詞の解説」という問題の根底にも敷かれていなければならないはずである。逆に言えば、この前提に基づいた中学英語レベルのリメディアル教育が行われている限りは、そのリメディアル教育は大学において実践される価値が確保されるということでもあるはずである。

最後に、「英語で何ができたらいいと思いますか？」という学期開始前にたずねた問いと「これからの英語学習では何を主にしたいと思いますか」という学期終了時の問いへの回答を比較しながら見てみる。この問いは自由記述であったため回答した学生は多くはなかったものの、得られた回答を比較してみると興味深いことが見えてくる。まずは学期開始前の学生の回答のほとんどが、「ペラペラになりたい」「外国人と会話したい」「映画を字幕なしで観たい」「歌の歌詞の意味が即座にわかるようになりたい」というもので占められた。対して、学期後の問いへの回答は、「単語力を強化したい」「基礎的な文法を身につけたい」「興味のある新聞記事を読めるようになりたい」といった具体的な学習内容を挙げるものが目立った。同様に、授業の中でもっとやりたかった活動には、TOEICの問題、発音練習などが挙げられた。ここに、英語の学力とは基礎の積み重ねによって築き上げられるものということに学習者が理解を示し始めたことが認められるだろう。

このアンケートの回答の集計結果に基づいて、本学の基礎クラスに最も効果的な教育方法を考案することで「相対的リメディアル教育」の一つのモデルをつくりだすことができ

る。それは教員の重要かつ最も基礎的な仕事である。これと同じく重要なことに、こうした研究過程を経ていくうちに、今もまたように、大学生に求められる学習者としての姿勢や学び方そのものに、一定の水準があることが徐々に明確になってきているのがわかるだろう。TOEICテストという点数だけによらない「絶対的リメディアル教育」における新たな評価基準や学力の測定方法の開発のヒントがここに隠れているように思われる。

4. 自律的学習者を育成するリメディアル教育のために

ここまで、大学のリメディアル教育とはいかなるものかという問題を起点にし、大学における英語リメディアル教育がなすべきこと、そしてその方法を考えてきた。そして、本学の英語リメディアル教育にあたるクラスの受講生を対象としたアンケートの回答分析を通じて、「相対的リメディアル教育」と「絶対的リメディアル教育」の展開と可能性を見た。

最後に今一度、リメディアル教育の現状に潜む問題に目を向けてみたい。奥羽・福元によると、予備校の講師や地元高校の講師を大学に招いて補修授業を展開することが全国的に多く行われているという。そしてそれがそのまま大学におけるリメディアル教育の実践とみなしているというのである。このように、リメディアル教育が大学にふさわしくない方法で行われる事態に陥ってしまうことに対する危惧にも耳を傾けるべきである。なぜなら、リメディアル教育の実践は、基礎学力さえつけばよいという考えに陥りやすく、大学における英語教育で学ぶべきものや、大学での学びのあり方といったものを忘れがちになるのである。そうなってしまうと、大学の専門学校化が始まる危険性が生じてくる。

では、大学の英語教育では何を指すべきなのだろうか。もちろん、「be動詞の解説」で終わることはなく、しかしながら、大学で目指すべき英語の学力はbe動詞の用法もその基礎に置かれていなければならないものである。何度も繰り返すように、英語の学力は基礎の積み重ねであるからである。学生の学期開始前のアンケートの回答にあった「ペラペラになりたい」という願いに欠けているのは、ペラペラと何を語りたいかという英語という科目の外に置かれている学習者自身の意識である。たとえば鳥飼玖美子は、国際共通語として

の英語の学力を身につけるべきであるといった提言をしている。これはつまり、英語教育において異文化理解というあいまいな目的を学習者に提示することをやめ、その代わりに学習者の関心事について英語でコミュニケーションを成立させる能力を獲得することを目的に定めるものである。そうすると、与えられた課題をこなすことも学習者にとって基礎学力の定着に欠かせないが、それを上回って重要になるのは、英語で何を伝えたいか、または受け取りたいかという意識である。この学習者の自律性がなければ、大学における英語教育は成立しないということになる。東京大学の教養学部ではTOEICテストには一切見向きもせず、「作文教育」にエネルギー及びお金を費やしていることに注目している寺島隆吉の論点もここにある。リメディアル教育がもっとも重要視しなければならないのは、学習者の自律性なのである。極端な例ではあるが、英語を使って何かを伝えたいというものがない大学生には英語教育は一切不要であり、そこにお金をかけることは無益であるとさえ寺島は断言している。

しかしながら、リメディアル教育を受けたいと願う学生がおり、また、彼らが本当に英語を用いて自分の考えを伝えたいと思う限り、大学の英語リメディアル教育は必要である。ことわざにあるように、馬を水飲み場に連れて行くことはできるが、馬に水を飲ませることはできない(You can take a horse to the water, but you cannot make it drink)とは言うものの、それでも、水飲み場まで適切に案内し、水を飲ませるための促しのいくつかの方法を試すことが教員には求められる。リメディアル教育の成功的な成立に必要な適切な教材、教育方法、学習者の自律した学習意欲がそろっている限り、たとえそのスタートがbe動詞の解説であろうとも、入学後4年間の間に自律した英語学習者が育つことができるのであれば、十分にリメディアル教育実践のための努力の価値はあるはずである。

註

1. 2014年2月12日読売新聞

〔参考文献〕

奥羽充規、福元広二(2013)「大学英語リメディアル教育再考」『地域学論集』第9巻 第3号105-122

小野博、村木英治、林規生他(2005)「日本の大学生の基礎学力
構造とリメディアル教育」『NIME研究報告』6:1-6
清田洋一(2010)リメディアル教育における自尊感情と英語学習」
『リメディアル教育研究』Vol.5, no.1, 37-43
合田美子(2011)「リメディアル教育と自己調整学習」『英語教育』
2月号、大修館書店、16-18
塩澤正(2004)Active Competenceのすすめ」『英語教育』7月
号、大修館書店、12-14
寺島隆吉(2009)「英語教育が亡びるときー「英語で授業」のイデ
オロギーー」明石出版
鳥飼玖美子(2011)『国際共通語としての英語』講談社
山岡華菜子(2012)「英語リメディアル教育でのオーセンティック教
材の使用」『リメディアル教育研究』Vol.7, no.1, 165-175

[執筆者]
亀山 博之
Hiroyuki KAMEYAMA
教養教育センター
Center for Liberal Arts
非常勤講師
Part-time Lecturer